



全国リレーエッセー  
広島県

「安楽死」「尊厳死」最近そういう言葉を目にするが多くなった。  
当然のことだが人は誰でも必ずいつかは死ぬ。しかし、具体的に自分の最期を考えている人は決して多くはない。  
**笑顔で答えて…**  
私が八十四歳になる女性の中森さんに初めてお会いしたのはこの診療所に赴任してきた二年ほど前になる。不正出血から見つかったご自分の病気が根治不能な子宮頸(けい)がんであることを知っておられた。  
前任の先生から、現在のところ積極的に治療をされる予定は

**亀田 直毅** 23期生・2000年卒



国保甲奴診療所の正面玄関

## 広島県三次市国保甲奴診療所

【私の勤務地】広島県の県北に位置する三次市甲奴町にある無床の診療所。常勤医師は1名。診療圏は主として旧甲奴町の人口3100人あまり。近年は、自治医大の卒業生が2-3年ずつ勤務している。

# よい医療できたのが、自問

「中森さん、子宮の方の病気を尋ねてみた。」

「もう入院はええです。これまでいっばいほかの病気で入院

ない、と聞いてはいたが折をみの治療はしないの？」

「はしてきたから…」となんともいえぬ笑顔で答えられた。

このころは病状も落ち着いて

いたし、往診させていただいたので、ゆつくり話もでき、大変お互いにとってよいことであつたと思う。

しかし、一年を過ぎたころから頻回に出血が起るようになり、貧血の治療を行わなくては

いけないような状況になった。鉄剤の注射(貧血の治療のため)で何とかしのいでいたが、それだけではどうにも難しくな

り、ついには出血のコントロール目的での入院を勧めることになった。

### 自信と後悔交え

拒否されるのを覚悟の上でその話を切り出したのだが、意外

にもあっさり「じゃあ、そうしましょう」と言われ、ほっとしたような、寂しいような気持ちで総合病院の婦人科の先生へ託した。

数日後に偶然、中森さんのご

家族とお会いする機会があつたので病院での様子を聞いてみると、言いくそに「実はおばあちゃん、すぐに帰ってきちゃつたんですよ。どうしても入院は嫌だつたみたいで…」と。  
「ご本人にお会いすると、先生、やっぱりなんとか家で過ごさせてください」と少し気恥ずかしそうに言った。

それから数カ月、残念ながら出血が止まることはなく、思うようには家の中も歩けない、という日もあつた。しかし、中森さんは最後まで家で過ごされ、ご家族に見守られながら穏やかに息をひきとられた。

本当によい医療、みとりができたのか? 患者さんが亡くなられた後、いつも心をよぎる思いである。時には自信を持って、時には後悔を交えて…

この時のことを振り返っていると、心の中の中森さんが「こつと」笑ってくれたような気がした。

(次回予定は愛媛県)